

Eureka X

六年制通信 No.21 令和4年10月7日(金)号

辞は達せんのみ

三千、数え方によっては六千とも言われる世界の言語をどのように分類するか。これは割と有名なのですが、文法的な特徴から三つに分類した例があります。例えば英語は単語の語尾が変化して複数を表したり過去を示したりします。こういうのを屈折語と言います。中国語を考えると、漢字の羅列ですから単語は変化しません。こういうのを孤立語と言います。孤立語は語順が非常に大切になります。そして我らが日本の言葉ですが、これは膠着語(こうちゃくご)と呼ばれ、意味を持つ語と意味のない指標、例えば意味のある「私」に意味のない「を」とか「は」をつけて目的語や主語とする、そのため語順は厳しくないですね。また、膠着語は文章にダラダラとほとんど内容のない言葉を追加していくことができます。「あなたを愛している」のあとに「かもしれないと思うことがひょっとしたらあるかもしれないが、しかしそんなことを何度も何度も考えてみたところで僕の気持ちはやっぱりどうしても変わらないに違いないかもしれないなど」と今更言ってみても仕方がないのではないだろうかと思わないでもないのです」、これ、英語で I love you. のあとにつけ加えることは不可能ですわな。意味のあるような無いような副詞が日本語には多いしね。いや、上に書いたのは笑い話のようなもので、実際にはここまでひどくはないですが、何が言いたかったかといえば、日本の言葉は冗長になりやすくできているということです。それを知っておくことが大切です。冗長とは簡潔の反対で「なくてもいいことがダラダラと続く様子」です。簡潔明瞭に書いたり話したりするには相当意識しないとイケません。それには的確に表現する言葉を知らなくてはイケませんから、豊富な語彙を身につけなくてはならない、つまりはそう言いたいのです。『論語』の簡潔な表現も孤立語という言語の特徴と無縁ではないと思います。「辞は達せんのみ」も簡潔な表現ですが、これは「文章はわかればそれでいい」より、私は「文章には余計な装飾を入れるな、簡潔に述べよ」と解釈しています。どの言語にしても自分の言いたいことを簡潔に、そして的確に表現するのは難しいことだと思います。やはり豊富な語彙を支えにするしか「辞は達せんのみ」の実践は不可能でしょうね。でも私は *Actions speak louder than words.* が正しいと思っていますけどね。

さて、話は変わりますが、9月17日(土)に「能楽キャラバン in 松阪」に行ってきました。普段から君たちには一流の絵画を見たり一流の音楽を聴いたりしなさい、つまり一流のものを体験しなさいと言っているつもりです。今回の能楽キャラバンも一流の芸術を体験するいい機会でした。ただ、正直に言えば、もっと勉強してから行くべきでした。残念ながら私には能楽を鑑賞するだけの知識が全くなかったわけで、仕方

なく途中から（かなり早い段階から）鑑賞ではなく観察に切り替えました。舞台上の演者の方たちの姿を丁寧に観察したつもりです。その上で感想を言えば、乱れない、の一言ですね。一度形が決まれば微動だにしない。あれは簡単にできることではない、どんな稽古をしているのだろうと考えていました。椅子に座る、しゃがむ、立つ、そういう動作に全くぐらつきややり直しが無い。乱れが全くないのです。ちょっと考えられない思いでした。君たちも毎日椅子に座っているでしょうが、椅子を動かしたり座り直したりしますよね。それに当然背もたれを使います。例えば丸椅子に座って微動だにせず一時間耐えられますか。考えられないでしょ。また、あの、しゃがんだ体勢から、どうして腹から声が出せるのだろうとも思いました。腰の位置を変えずにすり足で移動するのはものすごい筋力を使うはずなのですが、息に乱れもなかったですね。驚異です。余分な動作を極限までそぎ落としたのでしょう。静止画の連続のような美しさに感動しました。私の個人的な感想ですから、的外れかもしれませんが。

余談ですが、私は35年以上生徒の始業式などの整列風景を見てきました。情けないことに、昔の生徒より今の生徒の方が圧倒的にグラグラ動きます。正座をさせなくなってから余計グラグラするようになります。これも私の感想です。

そう言えば、今思い出しました。東京オリンピックの開会式は4時間近くかかりましたが、その間姿勢を崩さず背もたれも使わなかったお方が一人だけいらっしゃいました。お察しの通り、天皇陛下です。一体どんな鍛え方をなさっておられるのでしょうか。自然体でああいう姿勢を続けることくらい、陛下にはお勤めの一つにすぎないのかもしれませんが、私は、メディアで拝見するたびに感動しています。

今週のおすすめ

・新津春子 『世界一清潔な空港の清掃人』（朝日新聞社）

羽田空港が2年連続で世界一清潔な空港に選ばれたとき、実際に清掃人として働いていたのが新津さんです。NHKの「プロフェッショナル 仕事の流儀」で彼女のことが取り上げられた、そうです。私、見逃してしまいました。残念。

この人、中国残留日本人孤児2世で17歳のときに家族で日本に帰ってきたのだそうです。帰ってきたのはいいが日本語が話せない、そもそもの苦労が大変なものだったと想像できます。でもこの本には前向きに笑顔で頑張る新津さんの姿が書かれています。しかも心に刻みたい言葉で溢れています。アルバイトとして始めた清掃の仕事、それが本業となって20年以上、創意工夫をし、真面目に、そして心を込めて働く人間は本当のプロになれるのだと、新津さんに教えられました。彼女にとってプロフェッショナルの定義は「目標をもって、日々努力し、どんな仕事でも心を込めることができる人」です。素晴らしいですね。最近の、何か気に入らないことがあるとそれは全て自分以外に原因があると考え、幼稚でわがままで文句ばかり言っている人たちに読ませたいわ。ちなみに本書には「つけおき洗いは『時間×濃さ』」とか「ゴム手袋は裾を折り返す」など、清掃の豆知識も満載ですよ。是非ご一読を。

BGMは 大貫妙子の ピーターラビットとわたし でした…。